



## 知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945 年生まれ。1968 年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004 年に退職。Facebook 上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



### 「真実の口」のシーンはアドリブ

ウィリアム・ワイラー監督の不朽の名作「ローマの休日」、この映画の印象的なシーンの一つが真実の口の場面。偽りの心があるものが口に手を入れると手首を切り落とされるという伝説がある石の彫刻だ。

グレゴリーはアドリブで、真実の口に手を入れてなかなか抜けず、抜いた時に手がなくなっているという演技をした。これを真に受けたヘップバーンの驚きようは尋常ではなく、大声をあげて大慌てしてしまった。



グレゴリーがこうしたアドリブをしたのは、当時は新人で緊張気味だったヘップバーンの緊張を和らげるためだったのだ。それまでぎこちない演技のあったヘップバーンに、リラックスして演じることをさりげなく教えたという。





### ポスト・イットの発明は「偶発力」の典型例

ポスト・イット(付箋紙)は、スリーエムの研究員、スペンサー・シルバーによって開発された。彼は強力な接着剤を開発中に失敗し、非常に弱い接着剤を作り出してしまった。この弱い接着剤は当初、その用途がみつからなかったが、同僚が本の葉に応用できないかと思いついた。このエピソードは、偶然から大発明を生む「セレンディピティ(偶発力)」の典型例として知られる。

1977年に試作品が完成し、各企業に試供品を配って以来、口コミで広がっていった。1980年発売以降、ポスト・イット(Post it)という商品名で世界中に広まり、現在では100か国以上で販売されている。当初は黄色だったが、売れ行きが伸びるに伴い、蛍光色を用いたものやより大きいものなど、さまざまなバリエーションが作られている。

### バステューユは残虐非道な監獄ではなかった

一般に、バステューユは残虐非道な監獄であると認識されているが、実情は違う。部屋は5m四方であり、天井までは8mある。窓は7mの高さにあり、鉄格子があったものの、外の光は十分に入り込む。また囚人は、自分の家具を持ち込むこともでき、専属のコックや使用人を雇うことすら可能だった。食事もけっこう豪華で、嫌いなものがあれば別のものを注文することができた。牢獄内ではどのような服装も自由、好きな生地、デザインで服をオーダーできた。

また図書館、遊戯室などもあり、囚人が病気になった場合は国王の侍医が診察した。このため、他の監獄で病人が出たとき、病院ではなくバステューユに搬送することもあった。こうした環境が整っているため、出所期限がきても出所しなかったり、何ら罪を犯したわけでもない者が債権者から逃れるために入所したこともあるという。

1774年のルイ16世即位からバステューユ襲撃の1789年まで、収容された人数は合計288人だが、このうち12人が自ら望んで入所している。

### ハワイ諸島の旧名はサンドイッチ諸島

料理のサンドイッチの語源が、イングランド貴族のサンドイッチ伯爵であることはよく知られているが、実はハワイ諸島の旧名サンドイッチ諸島も彼の名に由来している。4代目サンドイッチ伯爵は海軍卿当時、ジェームス・クックの探検航海を支援しており、1778年1月クックがハワイ諸島を発見したときに伯爵の名にちなんで「サンドイッチ諸島」と名付けられたのである。



そして 1795 年カメハメハ大王が島を制圧、ハワイ王国を誕生させ王位に就いた。

なお、クックはニュージーランド、ニューギニアがオーストラリア大陸とは独立の島であることを発見したのをはじめとして、ニューカレドニア、フィジー、クック諸島など多くの島を発見した。そして、1779 年自分が発見して命名したサンドイッチ諸島で先住民との争いによって命を落とした。

### 「魔法使いサリー」、当初は「魔法使いサニー」だった

子どもたちから大人気を博した横山光輝原作の「魔法使いサリー」は当初「魔法使いサニー」の題名で、昭和41年から少女漫画雑誌「りぼん」に掲載された。ところが、5回連載したところで、「サニー」の商標権を持っていたソニーから「サニー」の使用が認められず、「魔法使いサリー」と名前の変更を余儀なくされたのである。（一説によると、別の名前をどうしようかと打ち合わせたときに、横山光輝氏のアイデアで、「ニ」を横に倒して「リ」に変えたとか）



なお、日産自動車の「サニー」はソニーから使用許可を得て昭和41年に発売され、トヨタの「カローラ」と双壁をなす大衆車としてベストセラーカーになった。

### マリリン・モンローを司法解剖したのは日本人

1950 年代に大ヒットした映画「ナイアガラ」や「七年目の浮気」で知られるマリリン・モンローは 1962 年 8 月、ロサンゼルス郊外の自宅寝室で死亡しているところを発見された（36 歳）。睡眠薬の大量服用による急性中毒で、「自殺の模様」と大々的に報道され、世界中に衝撃が駆け巡った。

この時、モンローを司法解剖した医師は、野口恒富という日本人である。また、野口はシャロン・テート、ウィリアム・ホールデン、ナタリー・ウッド、ケネディ大統領など多くの著名人の検視解剖を行っている。さらに、1976 年から 1983 年まで野口をモデルに「Dr. 刑事クインシー」が放送され、法医学の世界が多くの人に知られることになった。